【資料紹介】

手錢家所蔵連句資料一覧（下）

佐々木　杏　里
（公益財団法人手錢記念館学芸員）

摘　要

手錢家に残る文書の中から連句資料をリスト化した。手錢家に残る連句資料は、宝暦から天保までにわたっており、それぞれの時代に杵築文学に関わった人物、他所との人的交流、時代の変遷などを類推・特定するために大変貴重な資料である。本稿では、前稿の続きとして享和以降の連句を紹介する。

キーワード：連句、浦安、有秀、大社、手錢記念館

凡例

本稿では享和期以降の資料を掲載する。

資料はおおよそ年代順に配列し、通し番号を付けた。年代が記されていない資料のうち、その作品を収録した冊子の刊行年時や筆写年時が分かるものについてはそれに従った。

通し番号に続けて、連衆数と連句の形式を「三吟三十六句」のような形でしるし、さらに、連衆名を括弧で括って見出しとした。連衆名は資料に出てくる通りに記したが、必要に応じて「硯（季硯）」のように括弧で括って情報を補った。また「／」以下に、その連句を載せる資料名を記した。

連衆名が記載されていない資料であっても、他の資料や筆跡によって作者が類推できるものは、それを記した。

見出しに続けて当該連句作品を翻刻して記した。ただし、三句以上の連句については、発句・脇句・三句のみ記載した。

翻刻に当たってはなるべく原本の用字を残したが、一部通行の字体を用いたところもある。また難読の箇所は□とし、およその字数を示した。

手錢家所蔵連句資料一覧

◎有秀【白澤園】（一七七一～一八二〇）時代

64　辰正月八日　初会　臨江舎

三吟三十六句（寸龍・白澤・玄鹿・執筆）／仮綴じ一帖「誹諧連歌草稿」

哥仙

楼や笛は霞まぬ夕けしき　寸龍
　雲雀ハ落て谷の水音　白澤
春もやゝ萌たつ屮に餅殕て　玄鹿

65　正月十二日　白澤薗会

三吟三十六句（玄鹿・白澤・寸龍・執筆）／仮綴じ一帖「誹諧連歌草稿」

うくひすや洗ふて聞ん去年の耳　玄鹿
　牛友呼てしつか成春　白澤
若屮の野を一枚に吹しきて　寸龍

66　二月廿七日　臨江舎会

五吟三十六句（うら安・寸龍・つゆ丸・白澤・鹿（玄鹿））／仮綴じ一帖「誹諧連歌草稿」

引鶴や鼓聞せり和田の原　うら安
　霞の酔のつゝく野遊　寸龍
おのも〳〵詩哥に春を寿て　つゆ丸

67　三月十日　白澤薗会

五吟三十六句（白澤・寸龍・浦安・露丸・里蝶・執筆）／仮綴じ一帖「誹諧連歌草稿」

海原や唐艪漕行春の厂　白澤
　時雨し山の霞むあけぼの　寸龍
屮庵の五本の柳目をはりて　浦安

68　古松軒会

五吟三十六句（里蝶・うら安・白澤・玄鹿・寸龍・執筆）／仮綴じ一帖「誹諧連歌草稿」

春の風片原町の日和かな　里蝶
　あるしかしこく梅かほる軒　うら安
菫咲畦つれなくも代かきて　白澤

69　辰三月廿九日　葉山奇盛会

四吟三十六句（うら安・奇盛・白澤・寸龍）／仮綴じ一帖「誹諧連歌草稿」

木枕にふるも又よし花の宿　うら安
　野菜多きも春の一徳　奇盛
荒田打岸のさゝ波うらゝかに　白澤

70　文化五辰歳暮

独吟十六句（浦安）／懐紙一枚

首尾之唸

貸て也四千弐百につもる雪

更返物をさしいの除夜
千貫は自分の志義の場置にて

71　文化六年皐月朔日　白澤薗会
四吟三十六句（歸来・白澤・露丸・寸龍・執筆）／仮綴じ一帖「誹諧連歌草稿」

哥仙行
百里来て我忘れたりほとゝきす　歸来
昼さへくらき五月雨の窓　白澤
琴の音も風のまに〳〵近寄て　露丸

72　文化六年皐月朔日
四吟三十六句（皈来・有秀・露麿・寸龍・執筆）／懐紙一帖

誹諧之連歌
百里来て我忘れたり時鳥　皈来
昼さへくらき五月雨の窓　有秀
琴の音も風の順近寄て　露麿

73　文化七年皐月晦日　白澤薗会
五吟三十六句（歸来・白澤・浦安・寸龍・露丸・執筆）／仮綴じ一帖「誹諧連歌草稿」

哥仙行
山水に味かつきたりほとゝきす　歸来
椎の若葉の海見せぬ空　白澤
幻の身をかりそめに住かへて　浦安

74　文化七年六月十九日　日々庵会
三吟三十六句（日々庵・白澤・寸龍）／仮綴じ一帖「誹諧連歌草稿」

拝領の扇の富士の高根かな　日々庵
霰ましりの田子の白雨　白澤
白壁に烏尊くむらかりて　寸龍

75　午六月十九日　日々庵会
三吟三十六句（日（日々菴）・澤（白澤）・龍（寸龍））／懐紙一枚

拝領の扇の富士の高根かな　日
霰ましりの田子の夕立　澤
白壁に烏尊くむらかりて　龍

76　文化八辛未正月七日　嚔楽斎初会
七吟三十六句（日々庵・白澤・履信・寸龍・有風・雪桃・玄鹿）／一帖『付合草稿』

ほっこりと曙匂ふ霞かな　日々庵
野川遙に蜆かく聲　白澤
楼の北は柳の糸たれて　履信

77　文化八辛未八日　臨池軒会
六吟十八句（素号・日々庵・白澤・寸龍・有風・履信）／一帖『付合草稿』

引鶴の毛衣からん千代の友　素号
また初春のうら若き空　日々庵
荒皮の柱おかしく雪消て　白澤

78　文化八辛未正月初九日　雲眺窟会
六吟三十六句（寸龍・日々庵・白澤・履信・有風・雪桃）／一帖『付合草稿』
　鶯の鳴行枝に力ミかな　寸龍
　窓うららかにまと居せる友　日々
　唐土も手に取春の海つらに　白澤

79　文化未農四月
三吟八句（薄月庵・晴雨・梧桐）一帖『閑屋津里草』
　心よく草臥にけりなく水鶏　薄月庵
　卯花に曇る星の明ほの　晴雨
　風流のもれたる塔の流るれや　梧桐

80　文化八未九月二日　時雨庵の会　傳来悦章
四吟三十六句（日々庵・寸龍・有秀・履信）／一帖『付合草稿』
　月の文を染ませ花の言の葉に　日々庵
　穂に出るものも露の力そ　寸龍
　ぬり笠の袋のまゝに秋暮（「散」に直す）て　あり秀

81　未九月廿七日日々庵会
七吟十八句（一釣・うら安・寸龍・花丈・花叔・白澤・士口）／一帖『付合草稿』
　哥仙行
　山川の紅葉をひねる角力哉　一釣
　呉羽の雲に吹とちよ秋　うら安
　高台のひつみへ月の居りかねて　寸龍

82　同日同会
七吟十八句（白澤・花叔・一釣・寸龍・浦安・花丈・士口）／一帖『付合草稿』
　同一折
　秋風のゆかみを覗くすゝき哉　白澤
　汐に落込門の三日月　花叔
　鸞来れハしハ〳〵眼引あけて　一釣

83　未霜ふり月十九日　日々庵会
五吟三十六句（歸来・浦安・白澤・有風・寸龍）／一帖『付合草稿』
　時雨けり八雲を山の名に立て　歸来
　むれ飛千鳥夜を減して鳴　浦安
　ほく〳〵とわらくつ乾く柴垣に　白澤

84　文化八未霜月廿四日　時雨庵会
四吟三十六句（あり秀・寸龍・日々庵・素号）／一帖『付合草稿』
　兵の名は誰〳〵そ小夜千鳥　あり秀
　雲の埋たる□の箭　寸龍
　此庵ハ壁も襖もはり交て　仝

85　文化八未十一月廿八日　日々菴会
四吟三十六句（日々庵・白澤・寸龍・素号）／一帖『付合草稿』
　野も山も冬枯にけり葛かつら　日々庵

霰たはしる笠あけほの　白澤
喰事をひかな一日思案して　寸龍

86　文化九申正月九日　日々庵初会
五吟二十四句（日々庵・寸龍・白澤・素号・雪桃・執筆）／一帖『付合草稿』

鑓梅の無事を□ハるいほり哉　日々庵
下戸四五人に配るたわら子　寸龍
打霞むたもとに鶴鳴立て　白澤

87　申正月十二日　翠雲閣初会
七吟十三句（素号・日々庵・寸龍・呉竹・白澤・雪桃・雀子）／一帖『付合草稿』

蝶々のちりて見せけり花の中　素号
霞めてたき松のゆふ暮　日々
此春ハ連哥に菴すみかえて　寸龍

88　申二月廿九日白澤菌会
四吟三十六句（歸来・有秀・浦安・寸龍・執筆）／一帖『付合草稿』

十ヲ斗落て椿の暮にけり　歸来
雨の障子を覗く鶯　有秀
雲龍の釜のたまりや霞むらん　浦安

89　三月廿二日　白澤菌会
四吟十八句（維中・有秀・浦安・寸龍）／一帖『付合草稿』

はし畧
飛込た音よりかろき蛙哉　維中
もてなす風の柳一本　有秀
花もなき硯の海に春暮て　浦安

90　四吟十八句（維中・有秀・浦安・寸龍）／懐紙一枚

寿仲畧
飛込た音よりかるき蛙かな　維中
もてなす風の柳一本　有秀
花もなき硯の海に春くれて　浦安

91　文化九申九月十六日　懐紙一帖
五吟三十六句（蝉衣・白澤・日々庵・露丸・寸龍）／懐紙一帖

哥仙
咲て見ても月には遠し芦の花　蝉衣
露に宿かす雲の小波　白澤
項当の翁は秋のひしりにて　日々

92　文化九申九月十七日
六吟三十六句（蝉衣・浦安・寸龍・有秀・露丸・一止・執筆）／懐紙一帖

哥仙行
柳ちる日とに明るし草庵　蝉衣
もてなしかぬる月の庵窓　浦安
星白く秋風白く水澄て　寸龍

93　文化十一年甲戌十月廿六日　白澤薗
二吟三十六句（有秀・露麿）／一冊「誹諧連歌草稿」
　哥仙行
山茶花や障子銀はる蠅の音　有秀
　時雨それ行虹の夕栄　霧麿
歌箴発句箴此浦に　仝

94　文化十二乙亥七夕　白澤薗会
二吟二十五句（松茂・有秀）／一冊『付合草稿』
何故に星石となる天の河原　松茂
　入さの月をつまこしの舟　有秀
みそ萩に豕の寝姿やさしくて　仝

95　文政元年頃
三吟十八句（日々庵浦安・有秀・露丸）／一冊『椎のもと』（文政元年刊）
世に薫る椎の葉分の風高し　日々庵浦安
　立よる笠にほと、きす飛　有秀
湖ひとつ隔てし城に虹消て　露丸

96　文政二己卯三月二十六日
独吟十八句（有秀）懐紙一枚
　前尊君はたちまり五とせの忌にあたらせなふければ恐みてし
　み六、の獨詠をさ、け奉る
其むかし仰かん華の山かつら
　ひれふす幣をのほる陽炎
反橋をつはめするとく行かいて

97　独吟三十六句（白澤薗）／懐紙一帖「誹諧之連歌　上」
　哥仙行
足柄や馬士ひとり雲のみね
　真盛成岸の昼かほ
にょき〳〵と網干に嗅き風の来て

98　独吟十八句（白澤薗）／仮綴じ一帖「まほろし艸」
　天地不易といへとも世のうつりかはりハ天地の流行也四季同し
からす人間又しかり物の流行ハあめのしわさにしてまたくれた
く□のはからひにハあるへからすされハ誹諧新式の法格を守る
といへとも姿は時の流行に遊んて道は古翁の魂をうしなハさる
を俗談平話の媒とも言つへきか木からしの身ハ竹斎と與せられ
しも忘れかたみの一癖ならん吹けよ春風。咲も花也ちるも花也
と夕部に奈良茶一碗を喰ひてあしたに安エの次韻を乞ふ
　白澤薗
うつり行春やむかしをふかれける
　道を細みに薺咲里
春嗅き代官殿と代かきて

99　午六月末
独吟三十六句（白澤薗）／仮綴じ一帖「まほろし艸」
　哥仙行

明星や片山白き土用東風
　そよめく春田かきりなく見ゆ
長殿と今は呼るゝ身と成て

100
「古松軒追善誹諧之連歌」
五吟三十六句（寸龍・田（田柳）・日（日々庵）・澤（白澤）・玄（玄鹿）・執筆）／懐紙一帖
松になく去年の時雨を一めくり　寸龍
　なつかしき爐にかたりあふ友　田
古の気色を□に破られて　日

101
日々菴
五吟三十六句（里蝶・浦安・白澤・玄鹿・寸龍・執筆）／懐紙一枚
　哥仙行
春の風片原町の日和哉　里蝶
　あるしかしこく梅薫朝　うら安
菫咲畦つれなくも代かきて　白澤

102
七月六日
六吟三十六句（浦安・楚川・白澤・玄鹿・一止・馬嘶）／懐紙一枚
星川やかる〳〵しくも更渡り　浦安
　酒のあまりをかする文月　楚川
普請場の南は萩の咲出て　白澤

103
四吟十八句（嘘楽・田柳・馬嘶・松茂）／懐紙一枚
　哥仙
蓬莱をいたゝくよくのはしめ哉　嘘楽
　便り嬉しき窓の梅ヶ香　田柳
しら魚を霞の湖に汲兼て　馬嘶

104
二吟三十六句（玄鹿・寸龍）／懐紙一枚
天の川水持きらし秋隣　玄鹿
　蛍火従耳えて砂を這闇　寸龍
竹鎗をしやに構ひつゝく関守て　仝

105
五吟三十六句（有（有秀）・丸（露丸）・寸（寸龍）・田（田柳）・日（日々庵）・執筆）／懐紙一枚
梅桜若葉の光る月夜哉　有
　堤やふれてかほり来風　丸
楼は異のかつ鼓あやなくに　寸

106
五吟三十六句（寸龍・歸来・露丸・雪桃・履信・執筆）／懐紙一枚
　五十猛の浦に舩漕出して
ほとゝきす聲の色なる海涼し　寸龍
　盃にくる夏のしら雲　歸来
しら雲の中古やほのみへて　露丸

107
六月廿四日
三吟三十六句（白澤・浦安・楚川）／懐紙一枚
虫干の状や譲の書物箱

みしかき袖に貌の暑き日
はいかいの為に東の直明て

108　初会
十四吟三十六句（日々菴・白澤・玄鹿・時雨・猿子・呉竹・普月・十囲・里信・扇風・萑子・寸龍・有風・壮二・執筆）／懐紙一帖
此里の好士千古庵にあつまりけふの風興をはしめとして、月に六たひの文臺をひらく

月花の友の数よむ睦月哉　日々庵
さり行空に百千鳥啼　白澤
かとのある山を霞のもてなして　玄鹿

109　正月一日　二会
十二吟三十六句（普月・浦安・白澤・田柳・寸龍・呉竹・有風・猿子・扇風・雪桃・玄鹿・里信・執筆）／懐紙一帖

若草や土際白き風かふく　普月
先たのミあり庵の雪解　浦安
菎蒻に袋のき□匂ひ来て　白澤

110　正月六日　三会
八吟三十六句（寸龍・有秀・浦安・楚川・普月・千一・呉竹・執筆・里信・執筆）／懐紙一帖

誹諧之連歌
暁の雲やすハりて鳴蛙　寸龍
麦のほつれをすへる春風　有秀
土取の舩に桜を誂えて　浦安

111　二月一日　四会
八吟三十六句（呉竹・浦安・有秀・猿子・楚川・執筆・巴柳・里信・寸龍）／懐紙一帖

当座哥仙行
春風や松はやすらふ姿なる　呉竹
鳫かね遠く霞む夕山　浦安
夏近き庵の簾のほころひて　有秀

112　二月十二日　五会
十吟三十六句（有秀・猿子・浦安・寸龍・呉竹・露丸・里信・田柳・壺外・巴柳・執筆）／懐紙一帖

哥仙行
眼をおしみ〳〵牛寝る柳哉　有秀
霞をちらす鍬の陽炎　猿子
一筋の流に春やよとむらん　浦安

113　二月十六日　六会
七吟三十六句（猿子・浦安・寸龍・巴柳・呉竹・有風・露丸・執筆）／懐紙一帖

哥仙行
あけ〳〵て雪の裾野の雲雀哉　猿子
東風のしからむ門川の水　浦安
草庵の南に春を調へて　寸龍

114　二月廿三日　七会
七吟三十六句（普月・猿子・浦安・呉竹・楚川・執筆・過橋・里信）／
懐紙一帖
春雨やけふ腥き人も来す　普月
水屋の窓を潜るつはくら　猿子
加羅の香の柳の糸やつたふらん　浦安

115　二月廿六日　八会
七吟三十六句（壺外・時雨・楚川・浦安・呉竹・過橋・一止・執筆）／
懐紙一帖
哥仙行
桃笑や酔の究る櫂の音　壺外
霞の幕に画く村鳥　時雨
糸ゆふにつなける馬の睡りて　楚川

116　三月八日　九会
七吟三十六句（有風・有秀・壺外・普月・呉竹・楚川・里信）／懐紙
一帖
哥仙行
草笛の一手に舞ふや風の蝶　有風
蝶の行衝に暮る山里　有秀
兼題の霞を今に詠かねて　壺外

117　三月十三日　十会
六吟三十六句（里信・寸龍・白澤・一止・外（壺外）・呉竹・執筆）／
懐紙一帖
長日や拍子の狂ふ辻放下　里信
柳の弓張ゆるす夕風　寸龍
水暗く継尾の鷹の影さして　白澤

118　四月三日　十一会
六吟三十六句（有風・有秀・猿子・寸龍・里信・一止・執筆）／懐紙
一帖
露飼て遊ふ日和や更衣　有風
風ふハ〳〵と柏散る岡　有秀
一筋の水ハ岩間をくゝりきて　猿子

119　四月六日　十二会
五吟三十六句（猿子・露丸・有風・有秀・秀年・執筆）／懐紙一帖
ほとゝきす月の入野を横ニ啼　猿子
扇ひつゝく一昨日の雨　露丸
兀山を斜に庵つくらせて　有風

120　四月十三日　十三会
八吟三十六句（露丸・田柳・猿子・巴柳・呉竹・有秀・寸龍・一止・
執筆）／懐紙一帖
哥仙行
卯の花の月夜に白き天窓哉　露丸
水鶏にほそる暁の雲　田柳
住つかぬ簾に風のくゝり来て　猿子

121　五月十三日　十四会
六吟三十六句（田柳・玄鹿・猿子・有秀・里信・楠苗）／懐紙一帖
草の戸のぬるゝ夜を鳴水鶏哉　田柳
涼風はらむ明かたの雲　玄鹿
物すきの笠に発句を書付て　猿子

◎有芳【埜（野）塘】（一七八九～一八四三）時代

122　文政三年庚辰七月三日
十四吟三十六句（有秀・野塘・浦安・雪桃・喜朝・素川・田柳・一止・安雄・呉竹・葵衛・泉里・鳫水・執筆）／懐紙一帖
追善誹諧之連歌
松のちとせも限りあれと
さくもちるも世は花芥子の時津風　有秀
椽にかなしき夏の入相　野塘
海山をひと目にいほり住かへて　浦安
海山に眼のゆく庵や作るらむ　浦安

123　文政四年頃
十五吟三十六句（古人（有秀）・有芳・浦安・露丸・雪桃・里信・喜朝・素川・田柳・一止・安雄・呉竹・葵衛・泉里・烏水・執筆）／一冊『追善華器粟』（文政四年頃刊）
追善誹諧之連歌
咲もちるも世は花下の時津風　古人
雲はかなしき夏の入相　有芳

124　文政四年
三十六吟三十六句（古人克己庵・喜朝・更桂・直卿・李明・松華・とも・椋翠・李仲・里静・李朝・斧山・一笠・知雀・止水・松濤・南潮・喜扇・松栄・雨竹・桃置・李径・桃化・亀嶋・芝山・野塘・けん・そて・墨後・喜跡・長流・白羽・松居・朝鶏・昨非坊・浦安）／一冊『蓮のうてな』（文政四年刊）
辞世
哥仙行
世をかへて身は蓮の実の飛所　古人克己菴
汲閼伽に影なつかしき月　喜朝
色鳥も馴染の里に来るらん　更桂

125　辛巳五月廿七日　埜塘菴会　此日因家翁小滌忌正當用家翁句為発句
六吟三十六句（有秀・浦安・素号・埜塘・里信・一止）／一冊『誹諧連歌発句稿』
歌仙
ほととぎす終に蔦の祈り喰　有秀
村雨しきる槇村の夏　浦安
ひとりには事たる庵の夕暮に　素号

126　六月廿二日日　日菴会
七吟三十六句（素号・浦安・央・里信・一止・埜塘・雪桃）／一冊『誹

諧連歌発句稿』

涼しさや洲崎の五位の足弐寸　素号
雨の祈りにさゝく芦村　浦安
長役の始末ハ門にあらはれて　号

127　辛巳六月廿七日　臨江舎会
八吟三十六句（浦安・号（素号）・央・信（里信）・止（一止）・埜（埜塘）・桃（雪桃）・瓢（千瓢））／一冊『誹諧連歌発句稿』

御祓川瀬々の白幣花の波　浦安
秋風にほふ瑞籬の苔　号
日を覆ふ梶の一もと世にふりて　央

128　辛巳七月二日　梧桐薗会　七吟三十六句（里信・号（素号）・安（浦安）・止（一止）・塘（埜塘）・央・瓢（千瓢））／一冊『誹諧連歌発句稿』

一吹に秋を見せたる一葉哉　里信
砂に露もつ掃立の庭　号
盃の自慢に池の月澄て　安

☆七月十日　雪桃菴会　不参畧之　と記載

129　七月廿日　三日月菴会
六吟三十六句（央・浦安・一止・埜塘・千瓢・素川）／一冊『誹諧連歌発句稿』

荻吹や哀れも人の心から　央
月さし登る夕暮の窓　野塘
高根より落来る水の秋さひて　素川

130　巳七月廿四日　埜塘菴会
六吟三十六句（埜塘・浦安・里信・央・雪桃・素川）／一冊『誹諧連歌発句稿』

萩咲て尊く成ぬ月の庭　埜塘
玉敷はかり露の姫芝　央
猩々の舞の袂に秋さひて　信

131　巳八月十九日　杉林舎会
七吟三十六句（古人（露丸）・埜塘・浦安・一止・素号・千瓢・雪桃）／一冊『誹諧連歌発句稿』

松茂亭露丸翁小祥忌追善
嘗てミれハひとつ水也草の露　古人
友の数よむ松陰の月　埜塘
雁金や雲を目当に渡るらむ　浦安

132　九月四日　千瓢亭会
五吟三十六句（千瓢・浦安・央・埜塘・一止）／一冊『誹諧連歌発句稿』

鹿遠し枕にせまる波の音　千瓢
百里をかたる胴の間の月　浦安
這渡る雰の甍のきらめきて　瓢

133　九月廿二日　日々庵会
五吟三十六句（日々庵・素号・埜塘・一止・央）／一冊『誹諧連歌発句稿』
菊の庭二日酔して八千代経む　日々庵
露も目出たき着綿の月　素号
枢戸を開けハ虫の鳴止て　埜塘

134　十月三日　埜塘菴会
六吟三十六句（埜塘・央・浦安・素川・里信・一止）／一冊『誹諧連歌発句稿』
白菊の露ハつめたし后の月　埜塘
新につゝる霜の袖垣　央
五六人暖め酒にほろ酔て　浦安

☆　十月十七日　梧桐薗会　一冊『誹諧連歌発句稿』　☆記載なし

135　十月二十一日　三日月薗会
七吟三十六句（央・浦安・里信・一止・埜塘・千瓢・素川）／一冊『誹諧連歌発句稿』
霜雪の嘶をたゝむ桟子哉　央
岩に染込風呂の酒の香　浦安
海山を一目に岨の庵晴て　里信

136　十月廿四日　杉林舎会
七吟三十六句（一止・素号・千瓢・埜塘・央・浦安・里信）／一冊『誹諧連歌発句稿』
霜雪の世やうそらしき帰花　一止
小春の蝶の心よりとふ　素号
掃立の砂に鼬の道付て　千瓢

137　十一月廿七日　日々庵会
七吟三十六句（浦安・素号・素川・央・里信・千瓢・埜塘）／一冊『誹諧連歌発句稿』
咳の翁さひたり網代守　浦安
松新しき霜の暁　素号
時津風無事に庵の年を経て　素川

138　壬午閏正月十九日　埜塘集
七吟三十六句（埜塘・浦安・素号・千瓢・里信・一止・央）／一冊『誹諧連歌発句稿』
中垣の梅散らしけり猪の恋　埜塘
風またさむし風爐先の窗　浦安
一霞雪の高根の隔たりて　素号

139　文政五年五月廿七日
十三吟三十六句（有秀・有芳・浦安・千瓢・扇風・央・里信・雪桃・泉里・安雄・一止・素川・田柳・執筆）／懐紙一帖
追善誹諧之連歌
葉桜やまことの友が討にける　有秀

ほとゝきす啼□□れの窓　有芳
峯の雲月によい程遠のきて　浦安

140　文政九年頃
十七吟三十六句（橘隠・己千・一釣・波濤・東廬・吾友・楽二・東阜・壽山・素号・浦安・朝水・素川・央・一止・埜塘・安雄）／一冊『夢路農葉桜』（文政九年刊）
追善歌仙
葉さくらや夢のさめたる午時下り　古人橘隠
ひらく杜律に啼かむ乙鳥　己千
雲を吐く渓の岩橋とたえして　一釣

141　戊七月廿五日　不断庵会
七吟三十六句（央・浦安・野塘・素号・一止・素川・安雄）／仮綴じ一帖
ちる露の手にもたまらす稲の花　央
明わかたまる□町田の月　浦安
鳫の列うこかぬ雲を目当にて　野塘

142　幾望会　日々庵
八吟三十六句（浦安・有芳・蘭阿・古水・薄月・久麿・安海・茂竹）／仮綴じ一帖
うかれ女の聲や隣も月の宿　浦安
早稲酒を当にこそり寄友　有芳
木淡に零余子のつるの登るらむ　蘭阿

143　乙未八月廿二日　桂清堂庵
七吟三十六句（蘭阿・安海・松丸・茂竹・久麿・古水・芳（有芳）・執筆）／仮綴じ一帖
□読の願□たる相撲哉　蘭阿
小判ちらかる北市の月　安海
柳辺に終のなつを染させて　松丸

144　星夕会
五吟三十六句（日々庵・安海・蘭阿・古水・茂竹）／仮綴じ一帖
星合の影や雲居も遠からむ　日々庵
律のしらへにそよく呉竹　安海
小流の□魚釣へしとちりたちて　蘭阿

145　丙申正月四日（天保七年）　日々菴初会
五吟三十六句（奈良丸・浦安・蘭阿・茂竹・野塘）／仮綴じ一帖
藪越や姿の見へて初烏　奈良丸
風寒なる門川の水　浦安
傀儡子来る時人のうかれ出て　蘭阿

☆幾望会　（表落書きで読み不可）

146　天保十二年頃
十三吟十四句（一釣・浦安・安海・六村・素川・撫玉・樂二・一山・埜塘・南谷・杵麿・凡和・茂竹・執筆）／一冊『手曳能萬津』（天保十二年刊）

誹諧之連歌　清地連

八十年を握る手曳の松の春　一釣
雪あたらしき池の暖　浦安
塩物はあれとも蜆うりにきて　安海

147「大念寺観音堂奉納教行庵厳譽簾荘居士追悼輯」十吟十八句（桃里・成功・薄月・樂二・川苔・石露・青左・斯来・佐野・奈良麿）／仮綴じ一帖

傘もたぬ人や時雨の雨舎り　故人桃里
茶の花にほふ御明しの影　成功
配膳のおくり迎ひにとさついて　薄月

148 二吟四句（有芳・北墩）／懐紙一枚

釜かけて人を待ちけり初時雨　有芳
開た形に落る山茶花　北墩
それ鷹の鶸一羽を追詰て　芳

149 七月廿一日　不起断庵会
九吟三十六句（素号・央・田柳・一止・安海・龍光・月二・埜塘・素川）／懐紙一枚

竹の実をはむる一葉に月の色　素号
酒汲かハす縁の涼風　龍光
能程の霧の高根を見はらしに　月二

150 八吟三十六句（有芳・薄月・日々・一止・六村・木丁・古水・天兆・執筆）／懐紙一枚

追善野塘会

不如帰むかしを忍ふ五六人　有芳
日記繰せる涼風窓　薄月
開発の掟の松の枝たれて　日々

151 三吟三十六句（古人（有芳）・止記・蝉行）／懐紙一枚

出雲孝子有芳主ハすゝき庵の追福にさちある方〳〵の物し給へる草〳〵を遠ききた国のはて迄送らるゝに古き好みをおもひ出て秀詠を一巻とハなしぬ

紫の色花咲す山さくら　古人
八重の垣路に春寒き空　止記
遠霞蝶の眠りや覚すらん　蝉行

152 三吟三十六句（鷺白・止記・蝉行）／懐紙一枚

兀山の雲にふられぬふくと汁　鷺白
古き畳に冬ほたん散　止記
膏薬を延て□に草臥て　蝉行

◎大社関係者と思われる参加者がないもの

153 八吟百句（雪淀公・フ・画龍・綿水・栄里・松波・鳳有・玄留・冨有）／懐紙一帖

154 安永五年頃

十二吟二十四句（魚坊・路考・何遠・洞李・一柳・嵐軸・時習・独鴎・由之・酪水・草肥・牧牛）／一冊『出雲筵』

155　安永五年頃
十一吟二十四句（独鴎・以文・梅一・徐行・常太・瓦雀・石明・東下・道楽・作洲・花十）一冊『出雲筵』

156　天保七年　短歌行
二十四吟二十四句（妙寿大姉・松花・直路・墨後・一調・渕濱・崖人・柳枝・知萑・朝柳・白羽・松楽・朝花・少年吉太郎・なつ・更蚊・樹亭・杉葉・松以・斧山・喜静・杉翠・喜朝・筆）／仮綴じ一帖「しほむ花」

157　七吟八句（松以・喜朝・白羽・渕濱・柳枝・直路・雀人）／仮綴じ一帖「しほむ花」

（付記）
資料翻刻ならびにリスト作成にあたっては、湘北短期大学の伊藤善隆氏、島根県立出雲歴史博物館の岡宏三氏に多大なご助力、ご助言をいただきました。記して感謝申し上げます。
本稿は、山陰研究プロジェクト「山陰地域文学研究資料の公開に関するプロジェクト」（研究代表者・野本瑠美）、国文学研究資料館基幹研究「近世における蔵書形成と文芸享受」（代表・大高洋司）の研究成果の一部です。

List of Renku collection in Tezen Family Archives

SASAKI Anri
(Tezen Museum curator)

〔Abstract〕

This report is the list of Renku from the document that remains in Tezen Family. Renku in Tezen Family was made from Horeki to Tempoh period. Renku archives of Tezen Family is very valuable in order to find the person involved in Kizuki literature of each times and to study the exchanges with other regions people, changing of times.

Keywords : Renku, Urayasu, Arihide, Taisha, Tezen Museum